

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 15 日現在

機関番号：33930

研究種目：若手研究（B）

研究期間：平成 22 年度～平成 23 年度

課題番号：22792244

研究課題名（和文）在宅重症児の母親に与えるレスパイトケアの効果
短期入所通所サービスに焦点をあてて

研究課題名（英文）The effect of respite care services to caregivers of children with severely disabilities at home. Especially focus on the effect of short term admission and day care service.

研究代表者：中島怜子

(NAKAJIMA REIKO)

豊橋創造大学 保健医療学部 助手

研究者番号：90550278

研究成果の概要（和文）：レスパイトサービスの効果を明らかにするため、在宅で障害のある子どもを養育する主介護者 361 名に質問紙調査を行った。その結果、レスパイトサービスはその多くの利用者に休息・リフレッシュをもたらすなど良い影響を与えていた。しかしサービス利用の有無群における主介護者の介護負担感尺度得点に有意な差はなく、介護負担感の軽減までには至っておらず、それらのよい影響は一時的なものであると推測される。一方、施設型サービス利用や利用したいときに利用できたなど利用の仕方により介護負担感軽減に繋がっていた。

サービス絶対数の不足などの問題も明らかになり、それらの問題が利用の妨げとなり介護者のニーズにあった利用が進んでおらず、そのため介護負担感軽減など介護者へ十分な効果を与えるまでの機能を果たしていないことが示唆された。サービス供給量の増加が早急に望まれると同時に、少ない資源の中で介護者のニーズに合わせた効果的な利用ができるよう調整を図っていく必要があると考える。

研究成果の概要（英文）：In order to clarify the effect of respite care services, questionnaire survey was carried out to 361 caregivers of children with severely disabilities at home. The survey revealed that the respite care services were useful for caregivers to take a rest and refresh themselves. But there was no significant difference in scale scores of sense of fatigue between service users and non-users. Therefore, this service is useful for transient refreshing them, but it is not useful for reducing their feeling of fatigue, except a little relief of overwork by available use according to caregivers' needs at service facilities.

The major reasons for insufficient rescue of caregivers' overwork and relief of sense of fatigue may be derived from shortage of service facility and lack of systems to meet caregiver's needs. So, it is immediately desirable to increase the number of service facilities and to make systems for available service to meet the needs of caregivers using present resources.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 23 年度	100,000	30,000	130,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 生涯発達看護学

キーワード：小児在宅看護 レスパイトケア

1. 研究開始当初の背景

在宅で生活する障害のある子どもは増加しているが、その支援体制は不十分であり、子どものみならず介護者である親への支援体制も十分とは言えない。特に親は日常生活が極端に制限され、精神的・身体的・社会的に様々な困難を抱えている。そのような中、子どもの介護から一時的に解放され、介護者の時間確保ができ、休息、リフレッシュできるレスパイトサービスへのニーズが高まっている。しかし、レスパイトサービスは供給量不足や受け入れ体制の未整備など問題が山積みしており、レスパイトサービスが介護者を支援するために十分な機能を果たしているか疑問である。そこで本研究は、レスパイトサービス利用が介護者へ与える影響について明らかにし、その効果とサービス提供における看護への示唆について検討する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、障害児を在宅で養育している主介護者のレスパイトサービス利用による介護負担感への影響、サービス利用による満足度を明らかにすることである。レスパイトサービスとは、在宅支援サービスの中で、介護者自身が休息や自分の時間確保、リフレッシュの目的で利用するサービスとした。

3. 研究の方法

1) 調査方法：無記名自記式質問紙法

2) 対象者：在宅で障害のある子どもを養育する主介護者で、A市肢体不自由児父母の会、B市特別支援学校、C市訪問看護ステーション・居宅介護事業所のいずれかに所属、利用している361名

3) 調査期間：平成22年7月から平成23年1月

4) 調査内容：対象者の背景、レスパイトサービス利用の有無や種類等利用の現状、利用による満足度、利用時に困ったこと、介護負担感（中谷ら，1989の尺度を使用）

5) 分析方法：各選択式質問は単純集計した。またレスパイトサービス利用の有無と介護負担感との関連、レスパイトサービス利用の仕方と介護負担感尺度との関連については、Mann-WhitneyのU検定を行った。自由記述は質問に適した文脈を抽出し、類似性に基づきカテゴリー化した。

6) 倫理的配慮：大学の倫理委員会の承認を得た上で実施。各対象施設・団体の代表者に研究の趣旨・倫理的配慮等を説明、同意を得た上で対象者への質問紙配布を依頼した。対

象者へは文書にて研究の目的・方法・結果公表について説明、また研究への自由な参加、不利益からの保護を保障した。回収は、無記名・個別による郵送とし、返送をもって同意が得られたとした。

4. 研究成果

<結果>

質問紙は173名から回収があり（回収率47%）、そのうち139名（有効回答率80%）を分析対象とした。

1) 対象の属性：主介護者は母親133名（95.7%）、年齢は平均40.7歳（SD5.55）、一日の介護時間は平均11.8時間（SD7.08）であった。子どもの年齢は平均10.6歳（SD4.27）、疾患は脳性まひが最も多く、医療的ケアは約半数が有していた。日常生活動作における介助の必要性は食事・排泄・更衣・入浴・移動・外出の6項目とも「いつも介助が必要」が75%以上を占めていた。

2) レスパイトサービス利用の現状：在宅支援サービス利用者120名（86.3%）のうち、主介護者のレスパイト目的でサービスを利用したことがあるのは71名であった。そのサービスの種類は、日中一時支援40名（56.3%）、デイサービス24名（33.8%）、短期入所22名（31.0%）が多かったが、訪問看護（17名）等の訪問型サービスもレスパイトとして利用されていた。

レスパイトサービスを利用したい時に利用できたと答えたのは39名（54.9%）、受入れを断られた経験があると答えたのは45名（63.4%）であった。

3) レスパイトサービス利用による満足度（n=71）：サービス利用により介護が楽になったか（図1-1）、時間確保につながったか（図1-2）、休息できたか（図1-3）、リフレッシュできたかについて4段階で答えてもらったところ、いずれの項目も85%以上の人が良い結果を示していた。

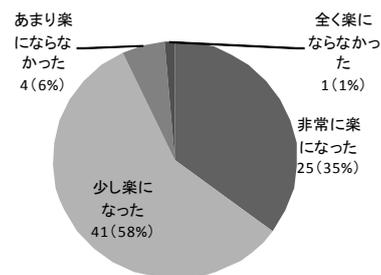


図1-1 介護が楽になったか

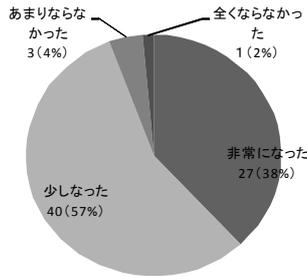


図 1-2 時間確保に繋がったか

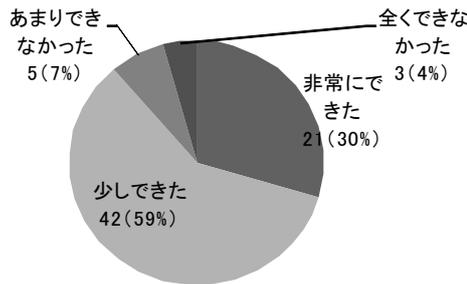


図 1-3 休息できたか

4) 利用時に困ったこと (n=71)

レスパイトサービス利用時に困ったことの自由記述から、《サービス絶対数の不足》《希望日時にあった柔軟な対応をしてくれない》《子どもの状態によって利用に制限がある》《利用方法の複雑さ》《職員の対応への不満》、費用の負担などの《利用による負担増》の6カテゴリーが抽出された。

5) 介護負担感尺度得点 (n=138、欠損値のある1名を除いた):各項目の質問に対し、4件法(1~4点)で回答を求めた。点数が高いほど負担感が高いことを示す(項目④、⑪は逆転項目、最高48点)。

介護負担感尺度合計得点は平均29.23(SD5.19)、最頻得点は28点であった。また、下記の尺度を構成する各項目のうち、最も点数が高かったのは⑦「今後の育児・介護への心配」平均3.22(SD0.79)であった。

- ① 育児・介護に対する重荷
- ② 趣味その他社会活動の制限
- ③ 精神的疲労感
- ④ 育児・介護への前向きな思い
- ⑤ 施設等で世話してほしいという思い
- ⑥ 家事などに手が回らない
- ⑦ 今後の育児・介護への心配
- ⑧ 近所への気がね
- ⑨ 育児・介護を代わってほしいという思い
- ⑩ 精神的にもう精いっぱい
- ⑪ 最後までみてあげたいという思い
- ⑫ 自分の健康に対する心配

6) レスパイトサービス利用の有無群における介護負担感尺度得点:レスパイトサービス利用の有無群における介護負担感尺度合計得点について Mann-Whitney の U 検定を行った。レスパイトサービス利用有群 (n=71) 平均 29.86 (SD4.54)、利用無群 (n=49) 平均 29.33 (SD5.47) であり、有意な差はみられなかった。

7) サービスの種類などレスパイトサービス利用の仕方による介護負担感尺度得点:短期入所の利用の有無、日中一時支援の利用の有無、デイサービスの利用の有無などサービスの種類における尺度得点、利用したい時に利用できたかどうかの2群における尺度得点、受け入れを断られた経験の有無群における尺度得点など利用の仕方と尺度との関連について Mann-Whitney の U 検定を行った。

その結果、日中一時支援の利用無群の方が介護負担感尺度項目①、⑥において有意に得点が高かった (p<0.05)。利用時の調整者がいない群の方が尺度項目⑧において有意に得点が高かった (p<0.05)。利用したい時に利用できなかった群の方が尺度全体の合計において有意に得点が高かった (p<0.05)。受け入れを断られた経験の有群の方が尺度項目④、⑥において有意に尺度得点が高かった。

<考察>

レスパイトサービスは多くの利用者に休息、リフレッシュをもたらすなどよい影響を与えていることが明らかになった。ほとんどの時間を子どもの育児・介護に追われる介護者にとって、レスパイトサービスを利用することで、子どもの介護から一時的に解放され、短時間であっても介護者自身が自分のために使う時間をもつことができる。それは、社会活動の参加を可能にしたりと介護者の生活の質を高め、また育児・介護を頑張ろうという意欲を高めることにも繋がる。つまりレスパイトサービスは在宅療養を継続するために意義のあるサービスであると考えられる。しかし、レスパイトサービス利用の有無群における介護負担感尺度得点には有意な差がなかったという今回の結果から、サービス利用そのものにより介護負担感の軽減までには至っておらず、休息できた、リフレッシュできたなどの良い影響は一時的なものにとどまっていると推測される。「利用時に困ったこと」の自由記述からも明らかのように、サービス絶対数の不足や受け入れ体制の不十分さが、利用したい時に利用できないなどの状況を生み、介護者のニーズに合った利用が進んでおらず、十分な効果が得られていないと考える。一方で、調整者がいることやレスパイトサービスを利用したい時に利用でき

た、受入れを断られたことがない人の方が、介護負担感尺度得点が有意に低いという結果から、利用の仕方によって介護負担感軽減に繋がるということが明らかとなった。つまりサービス供給量の増加が急速に望まれるのと同時に、少ない資源の中でも介護者のニーズに合わせた効果的な利用が進むよう、看護職は子どもや家族の状況に合わせ利用方法を提案すること、必要な時にサービスの利用ができるよう調整を図っていく必要があると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 中島怜子 (NAKAJIMA REIKO)
豊橋創造大学 保健医療学部 助手
研究者番号：90550278

(2) 研究分担者 無

(3) 連携研究者 無